

[制作記録]

アイルランド共和国における自己作品の制作と展示について

遠藤 研二

2007年3月に行なった自身の滞在制作について報告します。場所はアイルランド島南西部に位置するコーク市、人口12万の小さなところですが、首都ダブリンに次ぐ大きさの港湾工業都市です。

今回の展覧会場となったのはNational Sculpture Factory（以下、NSFと略す）というアーティスト・イン・レジデンス兼レンタルスタジオで、私とは7年前から付き合いがあります。もともとは地元の彫刻家たちが巨大彫刻を制作する場所を探していたところ、市電の整備工場跡であった現在の施設が国の援助で独立した非営利組織として再生され、芸術発信施設として設立されたものです。

私は本学着任以前から長年にわたりアイルランドとの関係を築いてきました。特に金沢での企画「C.A.R.K」にコーク市の人を招くことができたのはわれわれの関係を一層強化するものでした。

その甲斐あって、NSFから今回の「春のNSF一般公開日」のメインイベントとして自身の作品展示ができたことはこのうえなく喜ばしい出来事でした。NSFでは毎年春の一般公開の日には一人のメインアーティストを招聘し、パフォーマンスや作品展示をすることになっており、名誉なことに今回は私がそれに選ばれたわけです。

オープニングは3月28日でしたが年度末でいろいろと忙しいうえ、2月末から3月はじめにかけては愛知県美術館でのコンペ「新進芸術家の発見INあいち」とも重なり、スケジュールはかなり厳しいものでした。そこでベルリン在住アーティストの久保田弘成氏と本学学生の秋吉和城君に助力をもとめ、さらにNSFも現地作業員としてキーレン・シェラード氏を手配してくれました。

久保田氏は以前にも共同で仕事をしたこともあっ

て、その技術的技量は十分信頼でき、作品設置をほとんど任せることができました。

秋吉君は電気に関する技術に精通しており、美術作家としての私の仕事を手伝いながら美術家の仕事を実体験を踏まえて経験させるという意味を含めて抜擢、派遣しました。本人も初海外であったこともあり、非常に勉強になったと言っており、派遣して良かったと思っています。こうしたことに伴う難しい問題もありますが、今後もこのような形で少しでも若い人に海外での美術の現場の経験をさせて行ければと考えています。

私が現場に入った時には7割ほど完成していました。私が持参した追加部品の取り付けと作業を粛々と進めた結果、見事完成に至りました。結果は写真のとおりです。

オープニングには市議会議員を迎えた壮大な儀式が執り行われ、改めてことの重大さを認識しました。午後にはNSFのなかで自身の作品紹介とコンセプトについての講演を通訳を付けて行ないました。30人ほどが集まり、盛況のうちに長い1日が無事終了しました。

その後、助手の皆さんがコーク市から去り、私一人で夜の作品撮影に出かけました。その時、改めて自分の作品を見直して非常に感動したのです。「この気持ちが好きで作家活動をしているんだなあ」とつくづく感じました。今後もこの気持ちを活力として、作家活動を続けて行きたいと思います。

(えんどう・けんじ 共通造形センター)

